

神宮の古殿地 ——その歴史哲学的考察

元国立国会図書館専門調査委員
前國學院大學教授 文學博士

森田康之助

むかし野人あるあり、芹をこれ美なりとして、至尊にこの芹を献ぜんことを願つたといふ。本攷これもとより嗤ふにたへたる野人の芹、本紀要を通して神宮に献じ、以て御遷宮成れる慶祝の微意とする。

問題と方法

二宮尊徳関係の文書記録はおよそ一萬卷、全集に編んで一卷は菊版六百頁、全体で三十六卷、その膨大な量にもかかわらず、尊徳自筆にかゝるものは必ずしも多くはない。そこで尊徳自筆の断簡零墨を鋭意収集したのが『二宮尊徳真筆選集』（佐々井信太郎編、昭和十年）、この選集に収められた尊徳の零紙の一つにかういふのがある。

一、屋敷文字、空文字、仁文字一理也、屋敷内へ入り、竹、木、家、蔵、小屋、土手、堀、かぞへる時は屋敷さ
らに無し。やぶ敷、屋敷、蔵敷、土手敷、堀敷、庭敷と引ば屋敷無し。品々合而屋敷なる事能々しるべし。

（句讀筆者）

つまりかういふことなのである。屋敷といつてもその内に入れば、竹、木、家、蔵、小屋、さらには土手や堀があるばかり、これらをとりに去れば屋敷といふものはさらに無し、といはねばならぬ。されば屋敷と文字を以て表記したと

ところで、これは即ち本来は空であり無であるといはねばならぬ。仁義禮智信の五常もまた然り、仁の一元に立つてはじめて義・禮以下は義であり、禮であり、智も信もまた智であり信でありるのである。かうした思考の論理は『成実論』に見るところであるが、もとより尊徳にはこの佛典を披閲したといふあかしはない。どこまでも尊徳みづからの自證するところから、かうした論理を展開せしめてゐるのである。

このやうに考へてくれば、儒でいふ仁、佛でいふ空はそれぞれ別個のものにはあらず、ともにもとこれ一体一元なりと理會し体認するところが、あらねばならぬといふかうした把握とその自證から、尊徳の名著『空仁二名論稿』が撰られたのである。ついでには尊徳の屋敷文字云々といふこの思考の論理を神宮の上に演繹するならば、神宮といふ表記からして人は、神宮の神殿の上にのみその視座を据ゑることであらうが、これは神宮についてのその実を、手俣から漏きおとすことになるのではないか、とこのやうに思はれるのである。神殿の営まれた敷地の隣に肅然と静謐を保つた古殿地をも併せて、これを一つの視野に収めるところあらねばならぬと、このやうに見るところから、本編の浅くも且つ薄い考究がはじまるのである。

もとより、およそ存在するものはすべて、存在するといふ限りに於て、何らかの意味にて自己を顕はにし、自己を語るところがあると同時に、その顕にはなし得ないところの、それこそそれ以上の背後の意味をも併せもつものである。また人は現実の立場に立ち、現実の場に自己を限定するといふことに於て、深淺広狭の差はもとより免れないけれども、人はそのときその場にあつて必ず行爲的な性格を持つのであり、また持たされずにはゐないものあるを覚えるのである。月光の下、荒城に身を置くそのときには、おのづと春高樓の花の宴が頭念を駈けめぐるのであり、故郷の川に架かる土橋をわたるそのときに、少年のむかし母に手をひかれてわたつたその想ひ出は、母の手のぬくもりを今に直感せしめるものをもつのである。

かくて存在は一方に於ては客觀的表現の世界に連ると同時に、他方、人はそのときその場で行爲的主体として他者

に關係し、この他者を媒介として、人は自己自身となるのである。母の手のぬくもりを、時間を超えて今日如実に感得することとなるのである。この意味に於て、存在の問題は吾人の自覚的存在を出立点とし、またそのことが吾人の思考の基礎的な基盤にほかならぬ、といふことを思ひしるのである。かうした思考はこれとりもなほさず、歴史研究の上にあつては逸すべからざる視点であり、同時にまた哲学の問題でもそれはある、といつてよいのであるが、総じてかゝる関心と感覚とを以てなされる叙述は、もはや思想史の域を超出し、精神史とよばれる史体に属すると、このやうにいふのが、おそらくは最も適切であらうと思ふ。

—

神宮の式年遷宮については『皇太神宮儀式帳』に「常に二十箇年を限りて、一度、新宮に遷し奉る」とあるそのまゝに、さきほど肅然とその御儀の執り行はれたことを慶祝申しあげるところである。この神宮の宮地は内宮も外宮も、そしてまたその別宮もすべて「東西二宮地ヲサダメヲキテ、廿年ヲカギリテ造改シタテマツル所也」(『通海参詣記』)とあるやうに、それぞれ東と西とに主軸を南北の線にとり、二つの殿地が相接して並び、交互に使用されてきて、遷宮にあつてはそのいづれか片方の殿地は空閑地となるしきたりである。神宮ではこれを古殿地とよぶ。現神殿の建つ宮域の脇の白い玉石をいづばいに敷きつめた広闊水平のひろがりには、言語にはつくせぬ嚴肅さがたゞよふ。神宮当局職員の指示をまつまでもなく、参拝者にあつてもたやすくは立ち入るをためらはれる、肅然たる空間である。

このかつての神殿跡の殿地は、次の造替にそなへての新らしい神殿の予定地である。この古殿地の神殿の跡には、かつては神殿の床下、地中に埋めてたてられてゐた「心御柱」とよばれる一本の小柱が、神殿撤去のちもそのままに遺置され、これを風水霜雪からまもるための覆屋が、ひっそりとその上にたゞひとつ建つのである。そしてこの小柱は次の造替に先だち、近世以降では神殿竣成の直前に新にたて直されて、造替遷宮の後は新しい神殿の床下に二十

年をそのままに経過し、そして神殿撤去後の次の二十年間を、たゞひとりこの古殿地にそのまま、たちつゞけ、この広い空間がたゞの空間にはあらざるの聖地であるといふことを、問はず語りに語りかけ、斯く斯くしかじかと世に告げしらしめてゐる。であるから、遷宮ののちは内宮表参道から古殿地に通ずる石階は、古殿地といふ聖地のいはゞ結果でもある。

この意味に於て、神宮古殿地は單なる記念物的な旧址ではない。廢地でもなければ廢墟でもない。豪宕な神殿は破壊され、虧け折れた石柱のみがつらなり、神像は持ち去られて一体をもとゞめるなき、つまりからくも歴史の記憶としてのみ保存されてゐる古代ギリシヤの神殿址や、ソロモン王が建設したといふシリアの砂漠の旧都パルミラ Palmyra や、ダリウス一世時代のベルシヤ帝国の古い首都ベルゼポリス Persopolis などとは、これを対比するのは全くの當を失した視点なのである。神宮では古殿地とこのやうに称されてはゐても、その実は、今日只今にその千古のいのちをば生きつゞきに生きつゞけてゐるのである。次の造替と遷宮にあらかじめそなへて古殿地といふ空間を営み、これを肅々とたちつゞけてきた先人の叡智と感覺の深さに、敬意を表するものである。

二

しからばこの古殿地といふ鋪設は、神宮創建このかた乃至は遷宮といふしきたりのはじまつたその當初から、渝ることなきしきたりとして在るものなのであるか。藺田守良が「此大宮は何ごとも古制のまゝにて、後世の制を用ひざれば、上代の状の證とすべし」(『神宮典略』四、殿舎上、殿舎考一)といふやうに、古儀の尊重については格別に嚴なる神宮のことであるから、そのやうに思ひたいのではあるが、『儀式帳』ほか神宮関係の古史料には的確にこれを徴すべきものを欠くやうに思はれる。『三所太神宮例文』第廿六の、「白鳳十三年庚寅九月、太神宮御遷宮」とある條、その分注に「持統天皇四年也、自_レ此御宇_レ造替遷宮被_レ定_レ置廿年」云々、また『太神宮諸雜事記』第一がいふ古伝

「宣言状傳、二所太神宮之御遷宮事、廿年一度應奉令遷御也云々」とあるものの、この遷宮乃至は造替云々の記述は、何ごとも古制のまゝなる神宮のことであるから、古殿地といまいふ特別の鋪設のあるべきを、思はしめるものがあるとはいへ、その存在を的確に語るものであるとするには、なほ若干の留保を要するであらう。

『延喜式』の伊勢太神宮式に、

凡太神宮廿年一度造替正殿寶殿及外幣殿（度會宮及別宮餘社、造神殿之年限准此）皆採新材構造、自外諸院新舊通用（宮地定置一至限更遷）其舊宮神寶遷取新殿、

云々とあるのが、おそらくはその古殿地についての最も古い記述であるべく、この『延喜式』に先行する『弘仁式』にあつても、この宮地二處といふ記載は、おそらくはこれを見ることができたことであらう。すなはち右太神宮式の分註「宮地二處」とあるは、神殿の敷地とこれに隣接するところの、神宮のいまいふ古殿地とを云ふものであるに違ひない。ついではこの二處の宮地とあるにひきつゞいての「至限更遷」とある段については、いつの頃よりかこれを「更に遷せ」と訓んできてゐるのは、いかゞなものであらうか。『神祇志料』（第十一卷神社六）では「更に遷し奉る」と栗田寛博士もこのやうに訓んでゐるのであるが、これははともとも「更め遷せ」と訓むのが適切であつたであらう。「更」は『説文』には「改也」、「廣雅」では「代也」とあり、また世に「更始」といふことばがある。『禮記』には「其在天地之中者、莫不更始」とあるが見え、古いものを改めて新しく始めることである。また「更張」とは琴瑟の絃をあらためて張り直すことなのである。

かうした太神宮式の分註に見る「更遷」の「更」が改也、代也の謂であるといふことを如実に示すものが、茅屋根の形さびしく整ひ、木肌かゞやくばかり美しく造営を見た神殿であり、一新された数々の神寶であり、神殿の敷地である。敷地は敷石までが悉皆白石持の行事として真新しい純白の、それこそ角張つた石はこれを死に石といつて避け、宮川の清流に洗はれた丸みを帯びた敷石のみでうめつくされるのである。式年遷宮は神宮の百事一新である。遷宮ご

とに一新することを通して国家永遠無窮のいのちをば、眼前に認得し、悠久のいのちのいぶきを、こゝに感得するのである。

神殿と古殿地とは、このやうに長い歴史を通じて、遷宮のたびごとにその場とその役割とをとり替へひき替へ、それこそ「廿年二度東西二打替打替、遷幸御坐御事」(『神宮典略』所引の『寛正造内宮記』、菟田俊彦氏著『日本古代史研究』二)として、今日に及んでゐるのである。しかも古殿地には、さきの神殿床下の心御柱は、神殿床下に在つたときそのまゝ、にひつそりと息づいてをり、かつては神宮の御神寶はこの古殿地に埋め藏められたといふ伝承をもつてゐるといふことは、神殿地と古殿地との上に揺蕩たゆたふ時間はそのまゝ、に長い歴史の過去と、悠遠の未来との時間とを象徴してゐるといふことであり、神殿とその脇の古殿地とはどこまでも一体、一体であるが故にそのことがまさにそのまゝ、當今只今の現在といふことになるのである。時間はその様態を過去・現在・未来といふ三つの姿に於て考へるとするならば、過現未といふ時間の相を神宮がそのまゝ、直観せしめるものをもつ、といふことなのである。昔そのまゝの神宮の様式は当然のことながら、過去とは前後截断された今日といふ時代のその所産とこれを見るべきではなく、遷宮を管んだ時代の個別性はこれを損ふことなく、しかもそれらを、創祀のむかしをそのまゝ、今にもたらしきてゐるのである。遷宮の執り行はれたそれぞれの時代のもつ曲率はこれを承認しつゝ、しかもこれを乗り越えてきたといふことを思はしめるものなのである。

であるが故に、造営を見た神宮の上にその新しさを思ひつゝ、も、しかも同時に舊の正殿と同じ親近さを人々は感じとることができるのである。時間そのものにそなはる過現未といふ三つの相貌はこれを承認しつゝ、神宮に参ずる人はそれぞれ、過ぎ去つて今はなき出来ごとや人の俤を偲ぶことができるのであり、故人はすべてこの石階を踏んで参拝したのであると思へば、この土留めの石ひとつひとつにわが父と母とのぬくみを覚え、なつかしさはひとしほ、涙がおのづとこみあげてやまないものがあると。神宮はかうした人々の思ひをば、時の隔たりを越えて今に現実のもの

とする聖域なのである。神宮を心のふるさととよぶのは、かうした意味、かうした感覚からなのである。「この聖地において私はあらゆる宗教の根柢に存する統一性を感じる I feel the underlying unity of all religions」と記帳したのは、英国のトインビー博士であつた。博士の研ぎすまされた歴史感覚 *geschichtlichen Sinn* に敬意を表するに吝ではないが、わが国びとの神宮に在つての心の内なる感覚は、トインビー博士のそれとは内容とその質とを異にするものがあるを見るのである。吾人にあつては、神宮のもつ現在性の上に過去と未来とを直観するのである。換言すればわが国びとに在つては過去も未来も現在そのものである、といふことなのである。かうした時間感覚はわが国びとの上に見ることのできる著しい特質なのであるが、かうした特質は神宮の神域に身を置くそのときに、人により、よしんば深さ浅さはとりどりであるは当然のこととして、この特質は、ここに如実に体験するところの事実なのである。そしてこのことは、未来とは未だ此の當今只今にその姿を見せるなきものでありながらも、わが国びとの素樸な心意として、その上に流れるであらうところの時間に寄せる信頼の思ひを、すなはちその認識理性にはそれぞれ厚薄の差のあるべきながらも、その心のうちにやがて来るであらう時間の上に、厚き信頼と深き信倚の思ひとをば包蔵するところがある、といふことなのである。

現在は当然のことながら、過去と未来とが無しにはこれを知ることができない。現に在るものだけを頼む現実主義はかへつて現実をば見ることができない。現在がその人の眼と心とを塞いで、何も見ることも知ることもできないやうにするからである。過去になづみ過去に捉はれることもまた、現在を見あやまらしめるのであり、未来の上にもその思ひを馳せることもまた同様である。それは脚下を照顧することなき單なるむなし希望にすぎない。かうした事例をあまりにも多く吾人は知つてゐるのである。

以上、吾人が上に流行する時への信頼といふことを、吾人は神宮ならびに神宮のたゞずまひに於て、内證の事実として身心に承當するのである。このことはわが国、わが国びとにとつてはまさに本質的なもの直證であり体認にほかならない。わが国の長い歴史はこれまで、それこそ様々な世界を構築してきたのであるが、さうしたわが国びとの営んできた歴史の本質は、史上の出来ごとと換言すれば歴史的推移と過程とを通じてのみ、存在し得るのであつて、歴史を離れて他にこれを求めるべきものではないといふことであり、またかうした歴史の本質は、わが国びとの営む歴史によつて形成を見る、といふことになつたのである。およそ作るものは作られたものであり、作られたものは同時にまた作るものであると、このやうに考へてくるそのときは、かうした本質はその時間的な起源をもち、時間の流れのうちの一点にその誕生を有つ本質である、といふことであるには違ひないけれども、それはけつして超越的なものではない、といふことなのである。しかもさうした本質は果上の境界より再び因地に立つをいふ天台慧心流の従果向因の論理そのまゝに、本質は本質となるといふことを通じて本質となつたものなのである。それは人の世を超えた永劫のイデアといふやうなものではなく、人の営むなまなましい歴史的世界の風雪に耐へつゝ、わが国びとがこれを形成してきたものなのである。さればこそそれは、わが国の歴史的世界のうちにとどこまでも在りながら、高き灯として人を生みなし、人を形成してきたものでありつゝも、しかも同時に、かうして人が嘗作する世界を超えるものをもつてゐるのである。

しからば神宮、別しては古殿地が示唆し象徴する過去とは、いかなる構造をもつものであるか。過去といふからには今は既に無いものではあるが、また同時に當今只今に於て存在してゐるものなのである。想起されてくることによつて現在となるものなのである。それは記憶のうちにとゞまつてゐるだけのものではない。記憶はこれをいかばかり

遡つても現在となるといふことはなく、従つて過去の事実を的確に見るといふことはできない。あたかも日々新に起る社会の出来ごとを掲載した新聞紙を、一年の間保存してみたところで、一年といふ時の流れを通つて現在となり現実となつた世の活力、世の動向を的確に把握したといふことにはならない。單に集積しただけでは年間の動向なり世のもつ曲率なりを逸してしまふことは、吾人が常々経験するところである。いかにも過去は現在のはじめではあるが、過去をして過去たらしめるのは現在なのである。といふことは、本質的なものが活力をもつて生きてをり、さうした本質的なものが生き生き Lebendig と投映され、現在をして現在たらしめるものは、かうした本質的なものから發出してくる emanieren ところの精神力学的な何かなのである。

たとへば芸術史について考ふるに、芸術史の対象として芸術的制作物を对象的に見るといふことだけでは、その記述がいかに精細にわたり、緻密をきはめるものがあつたとしても、これを言葉の真の意味に於ける芸術史とはよぶことができない、といふことに比せられるであらう。制作者の体認するところのイデア的なもの、本質的なものが、いかに制作者を内から衝き動かし、内から出立する芸術的な意欲 das künstlerische Wollen から、駆りたてられるものがあつたかといふ、さうした精神的なる根源を闡らめ、その本質的な体認を踏まへての記述でなければならぬ。過去を生み、過去を規定するものはどこまでも現在なのである。

我にあつては虎蘭師錬独力の撰になる『元亨釈書』がある。この釈書はひとりわが僧史の白眉たるのみならず、本邦佛教の歴史ならびに宗派制全般にわたる佛教史として、今日に至るまで高い評價をうけてゐるその理由は、その体裁が伝賛論表志の五格を踏み、十伝十志を通串するに一表を以てしたところに求められる。この表を師錬は名づけて「資治表」とよぶ。「佛法人に現れ事に顕れて資治し、以て国家の政治を融和せしめ、宝祚永延の庶幾を實ならしめたり」と。またいふ、神器は天地自然に出づるもの、邦家の基はかく自然に根ざす。自然なるものは永延であり、宝祚は無窮なりと。この釈書の「王臣伝」はこのことを敷衍してその序にかういふ、「印度支那の諸籍を見るに未だ我

が国の醇淑あらず、……人皇二千年、一利利種、系聯禪讓して未だ嘗て移革せず、相胤ぐこと亦然り、閭浮界裏豈にかくの如き至治の域有らんや」(原漢文)と。かうした現在現実の把握と理解、ここに淵源する感激と感動とが師鍊の史的意志と関心とを内からか衝き促するものあつて、釈書三十卷の大著を大成させたのである。されば釈書は現在史なのである。現在の現実^に身を置き心をとめて過去を見、将来を語つたのである。背後に眼をむけた予言者として師鍊はあつたのである。歴史記述とは本来かういふものであらねばならない。師鍊のかうした史観、信念の撰述であるが故に、此の書を彼は建武のはじめ、後醍醐天皇乙夜の覽にそなへたのである。

芸術史の本義は作品の批判と評價につきるものではなくして、よろしく制作者に根源的にはたらしきかけてくる芸術的意志にまで及ぶべきであると同様に、史書の探究にあつてはその編述々作の *das geschichtlichen Wollen* を讀みとるところに視点を置かねばならぬ。そしてここに讀みとるところのものは、ほかならぬ現代史—現在といふものが、どこまでもその出立点であり、その骨髄であらねばならぬ、といふことなのである。『古事記』の序にいふところの

今の時に當りて其の失を改めずは、未だ幾年をも経ずしてその旨滅びなむとす。これすなはち邦家の経緯、王化の鴻基なり、故これ、帝紀を撰録し、舊辞を討覈して、偽りを削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ。

(岩波文庫本)

がすなはち、かうした根源的なる史的意志の認得と把持との上に立つ言立てであつたといつてよい。

また『太史公自序』にいふ、「往事を述べ來者を思ふ」、またいふ、「われこれを空言に載せんと欲するも、行事にあらはすの深切著明なるにしかざるなり」と。こゝにこのやうに云はしめてゐるのは、司馬遷その人の史的感覺 *geschichtlichen Sinn* をば内から衝き動かしてやまぬところの、史的意志そのものことである。

かくして神宮の宮殿そのものは、その傍らなる閑謐な古殿地とともに、両者は各個隔別のものではなくしてどこま

でも一体一元、相ならび立ち、自己自身を頭はにしてゐると同時に、頭にはなし得ないそれ以上の背後のものを包蔵した、ひとつの表現的世界を構成してゐるのである。されば吾人はこゝに在つて、歴史時間の根柢に息づいてゐる意志をばよみとり、歴史が伝へよう、表現しようとしてゐるものを認取し、これを行得しようとするのである。現実的な精神力学的なエネルギー real-geistige Energie を看得しようとするのである。時は流轉し経歴して相貌をそのつど変易してやまない。「盡界にあらゆる盡有はつらなりながら時々」(『正法眼藏』 有時)であることを承認しながらも、こゝ、神宮にあつては、過現末の三者は同時存在としての現在に於てこれある、といふことなのである。

このことは斯うも云つてよい。すなはち時といふものは不常不斷に変易し流行しながら、この変易流行の時そのものとの同時存在によつて照徹され、包摂されてゐるのである。そこで道元はかういふ。

有時みな盡時なり、有草有象ともに時なり、時々時に盡有盡界あるなり、しばらくいまの時にもれたる盡有盡界ありやなしやと観想すべし。(『正法眼藏』 有時)

このことはつまり「自己の時なる道理」(同上)の体認自證といふこと、そのことなのである。この照徹し包摂するところの同時存在とは、歴史を徹してはたらく民族の根源的なる意志そのものことである。神宮の宮殿ならびにその古殿地とはかうした民族的意志の表現そのものなのであり、不斷不常の時の流れのうちに人はあつて、時代ごとに最善をつくせる、さうした足跡なのである。もちろんのことながらこゝにいふ最善とは、道德的意味に於ける「善」をいふのではない。「どの時代もどの時代もそれぞれ神に直接するものであり、その價値はそれから派生してくるものが何であるかにかゝるものではなく、それが存在そのもの、當のそのもの自体の中に存するものである」とこのやうにいつたランケの名高い言(『近世史の諸時代』第一講、鈴木成高、相原信作訳、岩波文庫)が、かうした考へ方につき示唆するところが大きいものがある。

ひとつの時代が組織し構成する歴史的世界、そしてその時代にはそれぞれが有つところの方向があり、傾斜がある、

衝動がある。かうした衝動、かうした方向は、可視的對象的に意識されるといふことなくして、しかも人を規定し人を限定するものなのである。衝動はそれとは意識されるといふことなくして、アイデアをば、根源をば見ようとするさうした眼であり、さうした心なのである。この眼、この心は必ずしも豁然と開いて物ごとを見据ゑる眼ではない。時には盲目のこともあるが、いつも本質的なものを見徹し感得することのできる眼であり、心なのである。こゝにいふ本質的なものを見徹し感得することのできる眼とは、一箇半箇の私のものではなく、民族の歴史の本質からのそれとして、理想的なるもの、普遍的なるものに繋り、形成的建設的な方向に歩を進めしめる、さうした眼なのである。たとへば先には「南都煙滅即是破滅佛法」〔玉葉〕治承五・正・十一條〕と、東大寺再建のために高齡の身を励まして一輪車を操り、諸国の勸進につとめた俊乗坊重源がある。聖武天皇の素志を追ひ一文の錢、一合の米を論ぜず、力の多少に随つて勸進を募り、成功を祈つて文治二年以後は三回にわたり太神宮の參詣をはたし、建永元年六月、八十六歳を以て寂に入るまで、その全智全能を傾注するのであった（拙著『日本思想の構造』所収、「鎌倉佛教における神と佛」）。また降つては慶光院清順と周養がある。戦国乱世にあつて一紙半錢の志これ軽からずと勸進喜捨をよびかけ、内宮外宮同時式年遷宮の例を開いたその眼は、まさしくも本質的なものを見据ゑ、これを見詰め、これを感得する心をもち、本質的なものから語りかけてくるものを、聴きとる耳をもつてゐたのである。

ヘーゲルに名高い言葉がある。かういふ。イオニアの空はホメロスの詩の優雅さに寄與する所が多かつた。併し小アジアの地は常に滄ることなく、今日もなほ舊に異るところがないにもか、はらず、イオニア地方の民族の中からは、史上たゞひとりのホメロスが現はれたのみである（die Vernunft in der Geschichte）と、人口に膾炙するこの言は、深くも考へさせられるものを有つてゐる。千古の間、司馬遷のやうな人は多く出でたりとするも、『史記』は再びは世に出ることはないのである。

吾人がその生を営むこの世界は、それぞれの歴史をもつた歴史的世界である。斯うした歴史的世界を支へるものは

可視的な、対象的存在としての地域でもなければ、はたまた甲乙の、さらには丙丁の人でもない。それはそれぞれに生命をもつた地域であり人なのである。民族の歴史と伝承とが密爾に縋ひあひ交ざりあひ、織り合はされた地域であるのでなければならぬ。本質的なるものが語りかけてくる地域、さうしたものを聴きとる耳をもつた人であるのでなければならぬ。本質的なるものが語りかけてくる地域、さうしたものを聴きとる耳とが相互に噛みあひ、相互に媒介しあふ、さうした地域であるのでなければならぬ。勿論こゝにいふ本質そのものは、人はこれを手にとつたり触つたり、総じてこれを対象的するといふことはできない。しかし人にはさうしたものを求めやまざるを得ないものがあるといふのは、その地域がみづからの主体性をもつてゐて、そこから本質的なるものを人は何らかの意味に於て直観し、人をして感得せしめるものがあるが故に、人はさうした本質的なるものを求めてやまざるを得なくなるのである。かうした見得ざるものを直観し、即目的には形成し得ざるものをば、リアルに形成しようとする内的な衝動が、こゝに生まれてくるのである。建久元年二月二十二日、造伊勢大神宮役夫工米に關し、朝廷に対し請文を奉り「廿ヶ年一度之役に候、旁不可致候也、此事のみに候はず、背宣下旨候はむ輩はいかにも法に任て可有御沙汰候、且又隨御定仰て可禁沙汰候也、背君御定候はむ者をは、家人にて候とて、いかてか不被行其罪候哉」云々と言上する源頼朝である。この頼朝の請文は頼朝その人の歴史認識頗る鋭く、本質を感得し直観する眼と心とをもつてゐたといふことを語るものでなければならぬ（拙著同上書所収「神宮と両部の思想」）。いかにもイオニアの地からホメロスは二度とは生まれてくることはなかつた。ではあるが神宮はその神殿と古殿地とは二にして一、一にして二、繰り返し巻き返し頼朝の心を史上に生みなし、わが国びとの心を慶光院の心として生み返すのである。

四

こゝに至り思ふのである、歴史認識の対象を成り立たしめる根拠は、現実現在にあつて根源からはたらきかけてく

る傾向的なもの、衝動的なもの、乃至はそれに媒介されたものでなければならぬと。現実現在がそれとは具体的に鮮明と判断さをもつては識ることができずして、しかもその内には心の曲率をもつてゐるのでなければならぬ。かうした曲率とは、的確な実数の形で眼前に提示することはできないといふ、さうした曲率なのである。あり得たもののみではなく、あり得べかりしものも亦歴史認識の対象でなければならぬ。あり得べきものの側面には、過去が現在と同時にそこに立つてゐるのであり、同時に立つてゐるといふそのことは、それが良い意味にも悪しき意味にも実現されつゝある、といふことである。その得失是非をきめるのは、今はこゝにその具体相は在ることなきも、経歴する時の上に乗つて將來に來たらんとする「將來」、これが振舞ふところの役割でなければならぬ。未だ來たらざる「未來」が、やがてはその現実化を見るべく、未來ならぬ將來を將來と限定するものは、吾人がさきに云ふところがあつたすなはち現実・現在のもつ傾向性であり、曲率なのである。この意味からして過去と現在・未來といふ時間のもつ三様態は同時性を有つてゐる、とこのやうにいふことができるであらう。過現未の三時が同時性をもつその端的な認得と行取との上に、過現未の三時はあるのである。道元が「谿声山色の功德によりて大地有情同時成道し、見明星悟道する諸佛あるなり」(『正法眼蔵』谿声山色)といふのは、まさにこのことなのである。

現実の現代がもつ曲率や傾向性が未來を限定するのである。その現在のもつ曲率がどのやうな動きをもつかといふことは、現在に在つては頗る見透し難い。不透明であるが故に歴史記述の対象とはなることなく、またなり得ないのが實際である。しかし歴史家は現在現実を説かざる歴史として、その頭念にその胸裡にそれをリアルに有つてゐるの
でなければならぬ。感得するものがあらねばならぬ。このやうにいふのは、現実といひ現在といふ時間性のもつ生命力が、史家の勞作史業に滋養を供し活力を與へ、かうした力を内に培ひ涵つた経験とそのポテンシヤリテイとが、方法的に醇化されるそのとき、史家の上に何かを開示させるのであり、その何であるかは、史家に過去の理解を助ける強靱なる尖兵となり、後詰めともなるのである。たとへば頼山陽の『日本外史』以下の史業が、このことを語つて十

分なものがあるであらう。神宮にあつてこの古殿地が舗設され設定を見てゐる、といふそのことの精神的意味は、まさにこゝに求められると云つてよい。

二十年に一度東西に打替へ打替へ遷幸まします神殿地と古殿地、この神殿と神殿地とはまさに現在只今の時間の象徴であり、古殿地は流行する時間のもつ過去性と未来性との相貌の象徴にほかならないのである。このやうに考へてくるそのとき、マイネッケが過去と現在につき次のやうに云ふところに、耳を傾くべきものがあるやうに思はれる。

過去と現在、生と歴史とが一人の天才的な歴史家の精神の中で強烈且つ壮大に、互に作用し合ひ、その隠れた意味を交互に露はにするならば……自分の獲た独特な光を放つ政治認識をば同時代の人々に頒ち與へ、そして自分の見出したより高い真理をば、同時代の人々の熱情と誤謬に対する一つの異議として、申立てたいといふ衝動が、その歴史家の中に成長することもまた、あり得るのである。

〔ランケの政治問答〕、中山治一訳『歴史主義の立場』所収、三〇頁、原書名 Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, 1939)

マイネッケはこゝにいふ衝動を、史家それ自身の上に期待したのであるが、このことたるや、ひとり学究としての史家の上に於てだけ希まれるのみならず、「生成に於ける存在に就いて、或は歴史的事実、従つてまた現在の政治に於ける無時間的な原型と理念に就いて、その謎を解き且つ説明しようとする熱烈な感情」(同上書三一頁)を、ひろく衆庶の上に涵ふ所以となると、このやうにいふのである。このマイネッケのいふ無時間的な原型と、理念を内に培ひ外にはたらかしめる熱烈な感情、さうした感情の象徴的な意味をば神宮が、別しては神宮古殿地が内に秘めてゐるといふことができるであらう。古殿地の上には、わが国ならびにわが国びとの過去と未来とが象徴として潑地に、語りかけてくるものがあるのである。そして古殿地に隣る神殿は現在只今の時といふものを、肅然として表象してゐるのである。神宮はこのやうに現在としての神殿と過去ならびに未来の象徴としての古殿地との両者が、互に相倚り相

俟ち、相互に映發しあふものをもちながら、過現未は相互にまた同時に融即してどこまでも同時に存在するのであり、過現未の三は三にしてしかも一体一元なのである。古殿地の在りやうと神殿とは全く隔別なものではないのである。

五

私はいさゝか筆をいそぎ過ぎたやうである。古殿地の象徴する未来について、筆の及ぶところいまだ浅い嫌ひがある。

過去を現在に内在化せしめてゐるのが古殿地であるとともに、未来をも内在化せしめてゐるもののあるのもまた古殿地であるとのやうに、さきに言ふところがあつた。古殿地は次の遷宮には神殿がその上に鎮まるのであり、斯うした事実を通して悠久の未来をば直視せしめるものを有つてゐるのである。吾人が情意のうちには、かうした未来が息づいてゐるのである。古殿地の上に吾人が心意の根をば稔とおろし据ゑることにより、吾人は未来を知り、未来を予測することができるのであり、換言すればこのことは未来への信を培ふといふことにほかならない、といふことになるであらう。過去から現在に流れ来る時間とともに、未来から流れくる時間との交叉する一点が現在なのである。未来から一刻一刻一瞬一瞬流れてくる時といふものがあるのである。未来を確實に予測し未来を稔と把握することができるといふことは、現在只今に生きる者の上に、はかり難き強みと和みなごみとをもたらさずにはおかないものがある。未来を恃むといふだけでは、空想の譏りはこれを免れることができない。かうした譏りから免かれしめるものとして、單に未来を知るといふことを超えて、未来に寄せるゆるぎなき信がなければならぬ。かうしたゆるぎなき信といふものの精神的な構造を語つてゐるのが、古殿地なのである。

古代ギリシヤ悲劇に『繫縛のプロメテウス』がある。大神ゼウスから火を盗みこれを人間に與へたが故に、プロメテウスはゼウスのはげしい怒りに触れ、海に臨んだ断崖に鎖で繋がれた。彼は和解を勧められても屈せず、その身は

驚に臟腑を啄まれるといふ苦痛に耐へながら、ゼウスの暴君ぶりを痛罵してやまない。これといふのも、この絶大の權威者ゼウスの上にも、やがては没落の運命の来るべきを信じてゐるが故なのである。未来を知つてゐるといふことは、現在に生きるものにとりこの上なき大きな強みと、不倒不屈の勇氣と安心とをもたらさずにはゐない。プロメテウスは人間に火を與へたといふこと、すなはち人間に自覺と進歩とをもたらしたといふことを、誇りと思ふが故のことであつた。

小田原在の農家に出で、やがて藩士として小田原大久保家領下野の桜町四千石の支配地のほか、それぞれの藩主の依頼をうけて大名領の谷田部茂木、烏山、下館、さらにはのちには幕臣となつて日光東照宮領の施政に卓抜した仕法を実施して大きな成果をあげた二宮尊徳がある。もと小田原在栢山の農の出であるが故に、同僚藩士からいはれなき輕侮を蒙り、心なき上司からのことさらの妨害に遭ひながらも、その間いさゝかも屈するを知らなかつたといふのは、みづからの踐む道が天照大神開闢の大道そのものであるといふ、さうした自證と自覺に生き通すことができたからのことである。尊徳はかういふ、

皇國開闢の昔、外国より資本を借りて開きしにあらず、皇國は皇國の德澤にて開きたるに相違なき事を發明したれば、本藩の下附金を謝絶し、近郷富家に借用を頼まず……吾神代の古に豊葦原へ天降りしと決心し、皇國は皇國の德澤にて開く道こそ天照大御神の足跡なれと思ひ定めて、一途に開闢元始の大道に拠りて勉強せしなり。

〔二宮翁夜話〕 一三四

尊徳みづからが自得し自證した天照大神開闢の大道、この大道それは日常卑近の上にとるならば、そもいかなることであるか。己れを空しくするといふ至誠がこれであり、かうした至誠を實あらしめるのが推讓の心であり、行ひであつた。

それ入るは出たる物の帰るなり、来るは押し譲りたる物の入来るなり。譬ば農人田畑の為に盡力し、人糞を掛け

干鰯ほじかを用ひ、作物の為に力を盡せば、秋に至りて実法みのりを得る事必多き、勿論なり。

(同上四〇)

かうした心の至誠から法爾自然に湧出する推讓の心、この推讓をためらひ、推讓を妨ぐる心なき人の心を、尊徳は心の荒蕪の人とよんだ。

夫我道は人々の心の荒蕪を開くを本意とす。心の荒蕪一人開くる時は、地の荒蕪は何萬町歩あるも、憂ふるにたらず。

(同上五九)

天照大御神降臨のその昔は限りなき荒表荒蕪、鋤もなければ鋤もない全くの無一物、さうした大和島根であるが、大御神は至誠の推讓に一徹であつたが故に、荒蕪の徳に報ゆるがために鋤をとり鋤をふるひ、美田かくてつらなる今日があるのである。大御神開闢のときの心を心とし、大御神の踏まれた大道をわが道として踐み誤つことなきからには、ゆたけき稔りは約束されるのである。このことたる、大御神このかた何千年の歲月、すでに実験済み、実證済みなのである。この大道に立つといふ自覚と自證とが、尊徳の心に生き通してあつたのである。大御神の道は明るい未来を約束するといふ自覚は、これを云ひ換へると、さうした明るい未来の方から尊徳の上に、大道実践の心の支撐として降りてくるのであつた。未来への信といふことにほかならぬ。未来を知り未来を見る眼をもつといふことは、人の心に強い支撐と心の和みきともたらさずにはゐないのである。

神宮の古殿地はいかにもひつそりと静まりかへつてゐるけれども、わが国びとの上にどこまで秘めやかではあるが、言葉にはならぬ強い勢威エネルギ (real-geistige Energie) をもつて、はたらきかけつゞけてきてゐるのであり、わが国びとはさうした勢威をそれぞれの心の恃みとしてきたのである。

未来への信といふことを象徴し、このことを語りかけて一刻もやむことのないのが、神宮の古殿地なのである。古殿地のもつところの精神的な意義を顧み、これを反芻することは、わが国びとの上に言葉にはならぬ心の強みと和みともたらさずにはゐないのである。

神宮御遷宮の御儀を以て、民族文化の記憶装置であるとのやうに中西正幸教授は申された（神社新報五・十一・五）。現代と神代との交錯する神秘的な体験からの表白である。これよく云ひ得た言辭である。

御遷宮はわが国たみが遠いむかしから積みあげ、積みかさねてきた心意を、当今の只今に於てこれをまこと実にするの儀であること云ふまでもない。それは吾人が遠つをやの呼びかけに応へてのことであると同時に、只今此処にあつてははまだその姿を見せることなき未来を、今此処に於て *Jetzt und hier* 開闢するといふことこれなのである。過去の限定と未来からの限定とを今此処に於て体認し、自覚し、過現未の三時が三時それぞれの在りやうをもちながら、このやうに現在只今に交錯するを内證するといふことは、現在が現在となるといふことこれであり、このことはつまり現在が現在となるといふこと、すなはち自己が自己となるといふことであり、ひろく云つてわが国たみがわが国たみとなるといふことにほかならない。記憶装置といふことは、このやうにパラフレイズすることを通してはじめて、その内證を一段とレアルに明らめ得るものがあるであらう。

精神は單に自然的に時間の中を過ぎて行くといふことではなくして、自己意識の自發的な、自己意識的な活動の中で止揚せられる。そこで此の止揚とは思想の活動のことであるから、保存であると同時に浄化でもある。とこのやうに云つたあと、「精神は一面に於てはそれが現実在る所のもの實在、すなはちその存立を止揚すると同時に、單にその存在であつたものの本質 *des Wesen dessen, was er nur war* を獲得するといふことになる」（歴史に於ける理性」第二章第一節）とこのやうにいつたヘーゲルの言が、こゝに思ひ合はされてくるものがある。（平成六・一・二二）

本篇起稿にあたり、『神宮典略』ほか神宮関係史料につき、中西教授から教示をいただいた。謝するところである。